

はじめに

最近、歯学雑誌や歯科関連の学会などで「咬合（咬み合わせ）」という言葉を目にする機会が少なくなっていると感じます。「咬合」を冠する学会の演題も幅広い分野の内容のものが増え、聴講者の期待に応えられていないためか、参加者も減少しつつあるように感じます。

しかし、歯科医学の全体像である咬合治療は、歯科医師と患者さんにとって「咬める」というメリットをもたらします。さらに、今後ますます増える高齢者に対する咬合治療は大きな意義があり、治療結果がもたらす医院収入は医院経営上たいへん重要なことです。

咬合に関する論議には、上下顎の咀嚼運動論と、咀嚼を能率よく運動させる構造機構の咬合平面論があります。前者は、これまで多くの学識者によって解明されてきましたが、後者にはまだまだ多くの課題が残っています。

また、現在の歯科医学の基礎はヨーロッパ、アメリカにあり、教育もそれに従っています。それ自体を否定するものではありませんが、私たちが実際に毎日治療をしているのは日本人です。

今後は、日本を含めた東南アジア民族の歯科医学として、いま一度、歯の形態から顔面下部の三次元的構造までの研究がよりいっそう進むことを期待しています。

これからの歯科医療を担っていく若い先生方のために、老輩が少しでも役に立ちたいという思いから、49年の臨床と研究を書籍にしたのは9年前のことです。咬合の設定を従来のように感覚や経験で行うのではなく、セファロ画像をPCソフトを用いて分析することにより、可視化できるデータに変換し、それに基づいて患者さんの個有咬合平面を設定することについて執筆しました。

今回、新たに筆をとる決意をしたのは、そのノウハウを確実に実践していただけるようにするためです。総義歯作製のステップを余すことなくお伝えするこの「実践書」が、多くの臨床家の悩みを解決し、また新たな扉を開くきっかけになることを心から願っています。

「咬合」は歯科ばかりでなく、全身のバランスを保つために正しく維持されなければならないもの、いわば「医療の原点」であると考えます。

2015年9月

西村政仁